

1 背景 現代の境界の実態

名前が取り巻く境界

a. 名前を持つことで浮かび上がる輪郭

世の中には名前を持つことで確かな輪郭を認識できるようになるものがある。例をあげるなら、「雲」と言われたら空に浮かぶ雲全てを認識するが、「積乱雲」や「入道雲」と言われるとそれぞれ特徴的な雲であるため、雲全体の中から積乱雲という存在を抽出できる。その時に人間は無意識的に輪郭を感じている。

私たちが何かを認識するために無意識的に引いている境界は、名前を持つことで浮かび上がる事象の輪郭であると考え、「纏う境界」として捉えることができないだろうか。



b. 現代における住居形態と生活洋式の画一化

現代の日本では住居が画一的な空き家問題が大きな問題となっている。その理由として、世帯の形やライフスタイルが多様化する中で、画一化された住居形態が取り残されているからである。



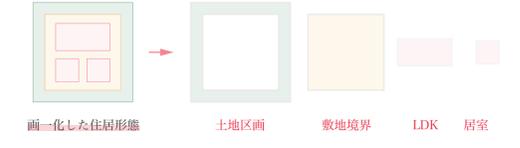
2 問題 名前に型取られる境界を再考する

標準化した住居形態と生活様式

a. 名前を持つことにより画一化した暮らしと建築

現代の住宅には名前を持つことで確かな輪郭を感じさせられるものが多い。区画整備や土地を購入することによって「敷地境界」という輪郭を認識できる。「内部」「外部」と呼ばれることで室内という環境が輪郭として浮かぶ。そして室内という空間にも「リビング」、「ダイニング」、「寝室」、「書斎」といった名前がつくことで物理的に壁がたか確かな輪郭を認識できる。

設計する段階で名前を与え、区画される設計では、住居形態と生活様式を同時に型取ってしまうため暮らしと建築が画一化されているのではない。



b. 「nLDK」という名前の住居形態の普及

「nLDK」とは現代の標準化された住宅形式において、名前によって型取られ、画一化した物の際たる例ではないかと考える。普及した当時は、革新的なアイデアであったことは予想できるがその型が名前を持って生まれたことで、同時に建築の輪郭も固定化されてしまった。

時代の流れによって変わる社会情勢の中で求められる住居形態にも転換期が訪れる。現代のように名前と同時に確固たる建築形態として存在するのではなく、多様性に伴う必要な空間を多様な名前と共に生み出し続けるような、柔軟性と持続性を兼ね備えた住宅が必要ではないだろうか。

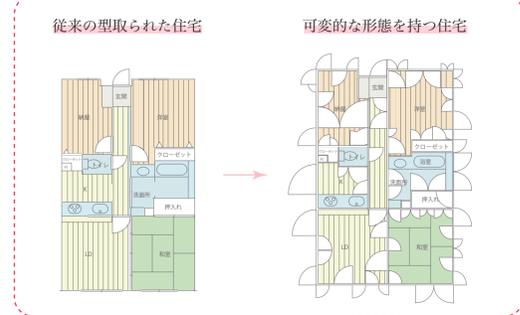
3 提案 建具による可変的な住居形態

能動的に変化する住宅の可能性

a. 建具を用いた可変的な住居形態

名前を持たない家とは、名前を持つことによって浮かぶ輪郭に変化がある家だと考える。本設計では住宅の敷地境界、外部、居室といった従来の建築において名前が形取っていたものを、全て建具を用いて設計を行う。

内外を繋ぐ場所、部屋を仕切る場所、お気に入りの外部空間、単身世帯同士で住む共有部、必要な形態から多様性に対応する形態、好みの空間を想像する形態といった全ての形態を住む人が建具を海兵を用いて選択することで、輪郭が浮かぶ住居を目指す。



b. 目指すべき形態の変異性

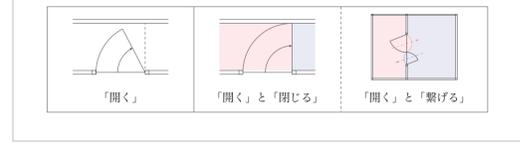
提案1 平面的なダイアグラム

従来の住宅では交わることのなかった平面的な建築的要素を並列させ、建具とともに輪郭を変更可変することで輪郭が混じり合う。



提案2 建具による輪郭のダイアグラム

建具における「開く」という根源的な操作によって「閉じる」操作と「つなげる」操作を同時に行う。



4 展望 多様性を受け止める家

語り継がれる名もなき家

生活様式の多様化に受動的である住居の将来性

「名前を持たない家」は建具を用いることで可変的な領域の輪郭を実現し、多様な住居形態に対応できる。

現代におけるnLDKは、核家族という住居形態とライフスタイルに対応し、普及した型であるが、生活様式や世帯の形は時代とともに移り変わるものであり変化を許容できない型の住宅はいずれ住む人は少なくなるであろう。

時代とともに変化を続けるであろう住居と生活の多様な形態を、住む人が選択することができる可変的なあるプランが受け止めることで、「名前を持たない家」がその名前とともに語り継がれていくことを目指す。

